

英語教育改善のための調査研究事業（H21年度・文部科学省指定）

本県では、平成21年度に、文部科学省から指定を受け、新見市第一中学校区の小・中学校と県立岡山操山高等学校において、「英語教育改善のための調査研究事業」に取り組みました。このページでは、新見市第一中学校区の小・中学校の取組を紹介します。

調査研究校では、英語教育を重点的に実施するため、小学校では、第1学年から第6学年において「外国語活動」として、中学校では、週3時間の「英語科」に加えて、週1時間を「英語表現科」として、現行教育課程の基準によらない教育課程を編成して実施しました。

その成果と課題をまとめていますので、小学校外国語活動及び中学校英語教育の充実及び小・中学校の円滑な接続に向け、参考にしてください。

1. 実践研究校

次の5校の調査研究校において、平成21年度、研究開発を行いました。

学校名	郵便番号	住所
新見市立新見第一中学校	718-0003	新見市高尾2364
新見市立思誠小学校	718-0011	新見市新見1970-1
新見市立高尾小学校	718-0003	新見市高尾806
新見市立西方小学校	718-0017	新見市西方1216
新見市立千屋小学校	718-0104	新見市千屋花見48

2. 取組内容

研究開発校においては、主に次に示すと通りの取組を行いました。

(1) 指導内容について

(小学校) 小学校第1学年から外国語活動を週1時間、年間35単位時間実施

- ・ 低・中・高学年の目標に沿った指導の在り方（「ふれる」「慣れる」「親しむ」の授業構成）
- ・ 体験的な活動を取り入れた指導の工夫
- ・ タスクを意識した単元構成に基づくカリキュラムでの指導
- ・ 複式学級における指導の工夫

(中学校) 週3時間の英語の授業に加えて、週1時間「英語表現科」の授業を実施

- ・ 「英語表現科」の年間指導・評価計画の作成
- ・ 外国語活動の年間指導・評価計画との接続及び系統的な指導の研究
- ・ 「英語科」と「英語表現科」の時間の効果的な関連によるコミュニケーション能力の向上
- ・ 「英語表現科」における新見市独自の副読本の効果的な活用

(2) 評価の観点及び評価方法の研究について

- ・ 外国語活動における観点別評価規準の作成
- ・ 外国語活動及び中学校英語科の評価の指導への活かし方の研究

(3) 教材について

- ・ 外国語活動における「英語ノート」と市採用の副読本の効果的な活用
- ・ 中学校「英語表現科」のための新見市独自の副読本の作成及び活用



【小・中学校の教員とALTのTT】



【カードを用いてのゲーム活動】



【電子黒板を活用した授業】

3. 運営指導委員会

お互いの取組について情報交換し、県教育委員会と新見市教育委員会及び調査研究校が連携して研究・実践を推進するために、年間2回の運営指導委員会を開催しました。会議は、調査研究校を会場として、公開授業及び協議を行いました。協議では、公開授業に関する意見交換、各調査研究校の取組報告や研究の推進に関するテーマを決めての意見交換を行い、鳴門教育大学 准教授 兼重 昇先生と新見公立短期大学准教授 山内 圭先生から御助言をいただきました。

(運営指導委員会の実施概要)

- (1) 平成21年度第1回：平成21年6月29日(月)新見市立思誠小学校にて開催
 - ① 公開授業(4年2組)に関する意見交換・指導助言
 - ② 調査研究校の取組報告・進捗状況確認
 - ③ 研究の方向性確認・意見交換
 - ④ 指導助言・質疑応答
- (2) 平成21年度第2回：平成22年1月22日(金)新見市立新見第一中学校にて開催
 - ① 公開授業(1年3組)に関する意見交換・指導助言
 - ② 調査研究校の成果と課題報告
 - ③ 研究の方向性確認・意見交換
 - ④ 指導助言・質疑応答

～ 兼重先生・山内先生の御指導・御助言から ～

- ・ 新見市で作成した絵カードを活用することは良いのだが、もともと設定されている表現にこだわるのではなく、子ども達が本当に表現したいことをもっと自由に言えるようにするためには、どのように指導すべきかを考えることが大切である。
- ・ 外国語活動では、他教科と同様、学級経営がうまくいっているかどうかが大きく関係してくる。本日の公開授業において、コミュニケーションを図るべき仲間がいなくて困っている児童がいたが、他の児童がうまく仲間に入れていた。普段の学級経営がうまくいっているからだと思う。
- ・ 評価について、子ども達は、何ができて何ができないのかを知りたいはずである。本日のように、1つの教室に3人の教師がいれば、できるだけ、個々の児童に関わって支援をして、児童の活動の様子を見取ることが必要である。また、教師の一人は、授業中に児童の記録をとることができるのではないか。小学校で指導・評価したことは、中学校でも活用できるので、小・中学校の教員の共通理解が必要である。そのために、デジタルポートフォリオ等で記録を残すと、中学校での指導にも役立つ。
- ・ 英語ノートを使用すると机上の学習になりがちという声も聞かれるが、小学校の後半になると、中学校の学習スタイルを意識した指導も必要なので、その意味でも「英語ノート」を効果的に活用したい。
- ・ 複式学級では、授業が学年差・年齢差を超えて子ども同士をつなぐきっかけとなるものなので、その長所を学校づくりに役立てたい。また、小規模校では、教員同士が共通理解を図って意思決定をしやすいというメリットもある。例えば、外国語活動で「食べ物」について学んだら、その食べ物を給食に出すこともできる。デメリットとしては、多くの人と交流する機会が少ないということがあるので、例えば、多くの人前で発表させる場をあえて設定することも大切である。
- ・ 小学校の先生方の中には、ご自身が大学在学中に、まさか英語を教えることになるとは思っていなかった方もおられる。小学校の先生方は、クラスの掌握、指導力は素晴らしいが、今後は、英語運用能力も必要となってくるので、そのための自己研鑽が必要である。また、県や市の研修でも英語運用能力の向上も考慮していただきたい。
- ・ 新見市は、国際交流が活発だが、先生方も国際交流して、その姿勢を子ども達に見せると

よい。例えば、先生方の訪問先の写真を授業で見せると子どもは興味を示す。

- ・ 市内のALTをうまく活用したい。Happy Week等として、市内のALT12名全員と一緒に市内の学校を訪問するという活動も考えられる。
- ・ 小・中学校の連携は大切である。小学校での指導内容・方法・使用教材を中学校に伝えて理解してもらうことが大切である。本日のように小・中学校合同の会で交流することは大切である。
- ・ 授業中、練習したことを発表させるだけでなく、子どものパフォーマンスの途中で、課題がある場合は、活動を止めて、改善点を共有し、その後改善していったり練習を繰り返す必要がある。
- ・ 新見市で作成された教材がとても良い。中学校の新しい教科書は、週4時間の授業用として作成される。新見市の次の課題は、週1時間の「英語表現科」の授業用として活用している教材である新見市独自の副読本を、今後週4時間の授業にどのように取り入れて活用していくかである。



【運営指導委員会】



【運営指導委員会会場校での公開授業】



【新見市独自作成の絵カード】

4. 成果と課題

(成果)

【小学校】

○ 児童の変容

- ・ 互いに自分の気持ちや考えを伝え合うことのできるコミュニケーション活動の場を多く設定し、その内容の工夫を行ったことにより、ゲーム等の楽しさのみを追求するのではなく、友達や教師との触れ合いや関わりの中に、楽しさや喜びを体感する児童が増えました。
- ・ コミュニケーション活動では、インフォメーション・ギャップを大切にし、自己決定をして主体的に伝え合わなければならないタスクを取り入れた結果、児童は、楽しみながら発話し、友達と進んで関わるようになりました。
- ・ 教師が活動を説明する際は、スキットやデモンストレーションで動作を付けながら行ったので、児童がスムーズに活動に参加することができました。
- ・ 給食時の放送を担当している委員会が、自主的に英語の歌を放送したり、英語を題材にしたクイズを出題したりするなど、児童が英語を身近に感じている姿が見られるようになりました。
- ・ 毎週金曜日を「Happy Friday」として、日常生活の中でも、できるだけ英語を使う日と位置付けて取り組んだ学校では、英語を使うことに抵抗感がなくなってきました。
- ・ ALTが、自然なスピードで、日常の出来事を毎時間の終末に話す活動を行った学校では、児童の「聞くこと」に対する意欲の向上が見られました。
- ・ 積極的に授業公開し、互いの授業を分析することにより授業改善を行った結果、アンケートによると、多くの児童が「英語の授業が好き」「英語が使えるようになりたい」「英語は大切だと思う」と回答しています。
- ・ 複式学級の指導については、実態に応じて、指導目標や評価規準・使用表現を設定し、低学年では学年差、中・高学年では個人差に配慮し、個に応じたきめ細かな指導や支援を行った結果、児童が意欲的に楽しみながら活動に参加するようになりました。

○ 教師の変容

- ・ 学級担任が中心となる指導体制や学級担任を補助して学校全体で取り組むための体制が整い、教員の指導力が向上しました。
- ・ A L Tとの打合せを英語で行うことにより、英語運用能力の向上に努めました。
- ・ 全教職員で、公開授業と研修を繰り返すことにより、外国語活動の授業への抵抗感がなくなりました。
- ・ 「振り返りカード」を工夫することにより、児童の意識や学習状況の変容を担当が把握し、次の指導につなげることができました。
- ・ 教材・教具の選定と購入を計画的に行い、保管についても、全員で共有できるように、機能的に整理した結果、授業の準備がスムーズにできるようになりました。
- ・ 小・中学校の教師が協同授業を行うことにより、互いの理解が深まり、それぞれの授業の改善につながりました。
- ・ 外国語活動ルームを設けたり、校内の案内表示を英語にする等、教職員全員で、環境整備を行いました。
- ・ 新見市独自の副読本と「英語ノート」を効果的に組み合わせ、授業づくりを行いました。
- ・ 校内研修では、教員の英語運用能力向上のための内容を入れたり、指導案検討を全員で行ったりすることにより、自信をもって外国語活動の取組ができるようになりました。
- ・ I C Tを活用した授業づくりの研修を積極的に行った学校では、全担任が、「英語ノート」デジタル版を電子黒板で活用できるようになりました。

【中学校】

○ 生徒の変容

- ・ 「書く」活動を行う際は、小学校との接続に配慮して、外国語活動でよく行われるゲームやクイズをする中で、生徒が楽しみながら「書く」活動ができるよう工夫したため、生徒は書くことに抵抗なく取り組みました。
- ・ 新見市独自開発の教材を使用し、友達とコミュニケーションを図ったり、人前で発表したりする表現の場を多く設定したことにより、生徒の中に自信が芽生え、英語で表現することに抵抗感がなくなりました。
- ・ ペアやグループでの活動を多く取り入れたため、相手の立場に立って丁寧に教え合ったりするなどの思いやりの心が育ちました。

○ 教師の変容

- ・ 「英語ノート」やその指導資料の研究を行い、外国語活動の理解に努めました。
- ・ 外国語活動の授業を参観したり、小学校の担任と一緒に授業を行ったりすることにより、外国語活動への理解が深まり、中学校での英語の授業改善につながりました。
- ・ 小学校で行っていた活動を少し発展させたゲーム等の活動方法を工夫したり、ゲーム的な内容から、徐々にスピーチ、プレゼンテーション的な内容へと発展させたりして、小・中学校の接続に配慮した指導を行いました。
- ・ 外国語活動の指導案について、小学校と協同研究を行いました。
- ・ 「英語表現科」の年間指導計画に外国語活動との関連を記入し、小学校での授業を踏まえた中学校の授業改善に取り組みました。
- ・ I C Tを効果的に活用し、生徒にとってわかりやすい授業を目指しました。
- ・ 毎時間行う生徒の自己評価をもとに、授業改善に努めました。
- ・ 先進校を視察し、他校の実践の良い点を取り入れながら、授業づくりを行いました。

(課 題)

- 調査研究校及び新見市のこれまでの成果を全県に普及することが大切です。
- これまで、新見市の特色ある取組として、中学校では、週 3 時間の英語の授業に加えて、「英語表現科」として週 1 時間実施してきましたが、平成 24 年度に新学習指導要領が全面実施になると、全中学校で週 4 時間の英語の授業が実施されます。新見市の特色ある取組として、これまで「英語表現科」で使用してきた新見市独自作成の副読本を活用しながら、コミュニケーションを一層充実したものとするよう更なる改善を図ることが必要です。
- これまでも小・中学校の先生方が互いに授業参観や協議を行ってきましたが、更に交流を深めたり、児童・生徒の交流授業を企画したりして、小中連携を一層推進することが大切です。

5. 岡山県の今後の取組

- ◇ 県総合教育センターの研修講座では、小学校・中学校を会場にした公開授業参観を伴う研修や英語運用能力向上のための内容も実施しますので、積極的に参加してください。
- ◇ 平成 23 年度から、岡山県教育委員会指定の「外国語教育推進事業」で、3 中学校区の実践研究校を指定し、小中連携に関する研究を進めます。公開授業の際は、是非参加して、各校の取組の参考にしてください。